5/3 朝日

インボイス制度「道の駅」支える農家直撃

農業始める人も減る

多くの問題点を残したまま10月からの導入が狙われている消費税のインボイス（適格請求書）制度は、「道の駅」などの直売所や地域のレストランなどへ農産物を出荷する小規模農家の暮らしと経営を直撃しています。山梨県北杜市で「家族農」を営む渡辺沙羅さん（30）は、「インボイスによって農家をやめてしまう人が増えれば、里山の農業インフラを支えることも厳しくなる」と危機感を語ります。（前田智也）

山梨・北杜「虫草農園」を営む
渡辺　沙羅さん

渡辺さんが営む「虫草農園」は、田んぼや畑、果樹園に原木林床栽培などで100種類を超える農作物を育てています。「無農薬で、肥料も地元調達の有機肥料だけです」

コロナ禍以前は、親子向けの農的暮らし体験などにも取り組んでいましたが、「現在は周辺にある三つの『道の駅』への出荷が主な収入源です」と語ります。

無農薬栽培は、自然には優しいですが人には厳しい農法です。「決して効率的な栽培方法ではなく、大きな利益が望める農法でもありません。みなさんの個人的な使命感で続いているようなところがあります」

販売敬遠の恐れ

そうした状況でも、取引先からインボイスへの対応を要求されてしまえば課税事業者になるかどうかの選択を迫られてしまいます。消費者や小規模事業者との取引が主である「道の駅」などの直売所で、インボイスが必要になるケースは限定的ですが、直売所の判断によっては免税事業者の農産物を販売することを敬遠される恐れがあります。

人間関係にヒビ

渡辺さんの場合、これまで取引していた「道の駅」のひとつから「インボイスナンバーを取得しなければ、4月から出荷はできません」と宣告されました。事実上、免税事業者を排除する動きだとして市議会でも問題に。最終的に、「道の駅」の指定管理者から免税事業者でも3年間は排除しない約束を得ました。

しかし、その過程で話し合いに応じようとせず、インボイス中止を求める人たちへ人間性を疑うような出来事まであったと言う渡辺さん。その「道の駅」とは、取引を止める判断をしたと語ります。

「免税事業者が排除されないように対応してくれている、その他の直売所の好意まで無になってしまう。経済的な打撃より、インボイスによってこれまで顔が見える距離感で仲良くしていた人間関係にヒビが入ってしまったことが残念です」

悪影響しかない

渡辺さんは、天ぷら廃油でトラクターを動かし、中古のソーラーパネルで発電し、車は電気軽自動車を使用する〝半自給自足〟の生活を家族でしています。

「用水の管理や草刈りなど里山の農的インフラは、ご高齢な農家の方たちによってかろうじて支えられています。そのほとんどが小規模事業者です。インボイスが導入されれば廃業される方が増え、新しく農業を始めたいと思う人も減ってしまう。不安です」

持続可能な社会を実現するためにも、インボイスは悪影響しかないと訴えます。「高齢化や低成長社会に向けて、化石燃料に頼りすぎない生活や食料自給率を上げることは絶対に必要です。日本の未来や安全保障を考えても、そうした方向に進むべきだと思っています。どの点から見ても悪影響しかない、インボイスは中止してほしい」